

浪人時代の1年間は、 かけがえのない オンリーワン・オンリーワンス (一期一会)の原点

Special
interview



私は、昭和 47 年に早稲田ゼミにお世話になりました。と言っても、その年に高校を卒業したわけではありません。私は7歳のときに父を亡くし、家庭の事情で長野県池田町の工業高校の建築科を卒業しました。しかし向学の思いを断ち切れずに上京し、まず予備校に入るための学費稼ぎに1年間を費やしたのです。毎朝3時半から夕方5時まで、新宿中村屋の笹塚工場で、中華まんを作る仕事でした。中村屋は大学に入ってからもお世話になり、私の学生生活を支えてくれた職場です。東北から出稼ぎに来たおやじさんの手紙を代筆して、一緒に泣いたこともありましたね。

上京して1年後に早稲田ゼミに入ったのですが、それは高校の同級生のススメでした。彼が言うには志賀先生という、すばらしい英語の教師が早稲田ゼミにいるということです。当時の私は、国語や世界史は独学で勉強できても、英語の成績はゼロに近かった(笑)。私はどうしても、その志賀先生に教えていただきたくて、早稲田ゼミに入ったのです。創立者の小山湖南先生も長野県出身で、とても温かなまなざしをむけていただき、ご縁を感じましたね。

志賀先生は私たちに人生を教えてくださいました。心がいちばん研ぎ澄まされた時代に「君たちは負けたんだ、敗北者なんだ。でも負けたことは宝物にもなる」と励ましてくれました。私は英語がまったくわからない状況だったので、週に2〜3回は徹夜で机に向かい、先生に質問をするという勉強を繰り返しました。体重も13キロ減りました。

あるとき、先生は授業中に疲れて寝ていた私の背中にそっと手を置いてくれました。ふと見上げると、そのまなざしが「がんばりなさい」と言ってくれているようで、胸に熱いものがこみ上げてきました。私は今でも、そのときの志賀先生の手を「神の手」だと思っています。私にとって、まさにオンリーワン・オンリーワンス、一期一会の瞬間でした。

その後も必死に勉強を続けましたが、夏期講習はお金が払えなくて、先生の講義を外で聞いたものです。

志賀先生の最後の授業は試験をして、高得点者は先生に名前を呼ばれます。先生は「宮澤敏文」と私を二度呼んでくださいました。成績がゼロの生徒をよくぞここまで引き上げてくれたと感謝の思いでいっぱいでした。結果的に私は、明治大学の政治経済に進んだのですが、今でも志賀先生の授業、早稲田ゼミのキャンパス、浪人時代の一瞬一瞬は鮮明に覚えています。

それから大学に入学しても、志賀先生の教え子は自発的に集まっては勉強を重ねてきました。その勉強会がやがて「志問会」に発展して、志賀先生亡きあとも1年に一度集まって、お互いの志を確認合っています。予備校の先生を慕って、これだけ人の輪が広がるのも珍しいことでしょう。私自身の仕事においても、先生にアドバイスをいただき、先輩、友人たちのネットワークにどれだけ助けられたかわかりません。

私には4人の男の子がいて、現在、2人が大学に進んでいます。2人とも進学高校に進みましたが、高校球児だったので、勉強はなかなかできませんでした。しかし、それは1年あれば取り戻せます。2人とも一浪して一般受験で大学に進み、それぞれたくましく成長しました。浪人できる人は浪人したほうが良いと思います。この不安定な肩書きがない時期が大切なのです。どこの大学でもいいです、そこでどう学ぶかです。

これから大学進学を考える皆さんは、どうかかけがえのないこの時期に、必死に勉強してほしいし、多くの人と出会って自らを深めていただきたい。オンリーワン・オンリーワンス、一期一会です。

Profile

【長野県議会副議長】

宮澤 敏文 さん

1952年生まれ。明治大学政治経済学部卒業。

昭和電工、衆議院議員公設秘書、会社役員等を経て、

1995年、長野県会議員に初当選。

現在、長野県議会副議長。

